

ピンクのゴジラ

【教え子たちには、感謝してもきれない。詫びても詫びきれない】

かつての担任した生徒から電話がきた。生徒といってももう40歳半ばになるはずだ。10年ぶりに同級会をするという。中学生の時と変わらない声を受話器の向こうから聞こえる。なつかしい。もう30年も前に担任をした生徒たちだ。

教師になって初めて担任となった私は、今思うとぞっとするほど傲慢な教師であった。自分の価値観を押し付け、思い通りに生徒をコントロールしようとしていた。そんな担任だから、生徒たちは私にぶつかってきた。苦闘の毎日であった。ある時には自信をなくし、またある時には感情的であった。情けない担任であったと、申し訳なく思うが、その時のわたしは精一杯であった。そんな日々を過ごし、生徒たちは3年生になった。1,2年生の頃よりは生徒との関係は改善されつつあった。私がどうこうというよりは、生徒が成長したのだ。

その事が起こったのは12月の保護者懇談会の時であった。午後の懇談の時間、なんとなく生徒たちの動きがおかしい。何か私に隠しているかのように、目で合図をし、どこへともなく消えていく。私は何かあるのかな、と思ってはいたが、3年生の大事な懇談会なので、懇談に集中していた。

保護者懇談会が終わって1,2日たった、5時間目の授業の時であった。私は生徒たちに呼ばれた。その学校は木造校舎の古い建物であった。確か調理室であったように思う。部屋に入ると学級の生徒たちが並んでいた。何だろう、と私は思った。学級長が、しゃべりだした。

「先生。長男誕生おめでとございます。僕たちからプレゼントがあります。」

一か月前、私の長男が産まれていた。その長男の誕生を祝して、生徒たちが私にプレゼントをしてくれるというのだ。それは、1メートル以上もあるピンク色したゴジラのぬいぐるみ、赤や緑のよだれかけ、ピンクや青色のタオルなどである。明らかに手作り。一針一針生徒全員で縫い上げたものだ。

私は、驚きと嬉しさのあまり、生徒に何を話したかよく覚えていない。ちゃんとお礼を言ったのかも覚えていない。ただはにかんだような生徒たちの笑顔が心に残っている。

受験準備で忙しい12月の懇談会の午後である。後で話を聞くと、都合つく者が順番で学校に残り製作したらしい。下校時間後の作業である。多分多くの先生が承知をし、協力してくれたのだろう。家庭科の先生の指導もあったようだ。多くの人に理解、協力してもらい成しえたことであることは、容易に想像できる。生徒たちの気持ちが私は嬉しかった。

私は、ふと考えた。

こんなに嬉しい思いを生徒たちは私に与えてくれたが、私はこの子たちに一体何をしてきたのだろうか。私は教師としてこの子たちに何ができるのだろうか。

その問いは、しばらく私の心を離れなかった。そして、私なりの結論に至った。教師としてできることは、子どもたちに心ゆく学校生活を実現することであり、楽しい授業を提供することではないか、教師はそれしかできないのではないか、ということである。

私は、この子たちとの出会い、教師として何をすべきか教えてもらった。この時から、私は学級づくりの勉強や授業研究を本気で始めた。恥ずかしい話であるが、教師になって4年目のことである。

言うまでもないが、私の長男はピンクのゴジラで遊び、大きくなった。